
REQUIEM

三石 麗

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

REQUIEM

【Nコード】

N1057G

【作者名】

三石 麗

【あらすじ】

すべては宇宙暦1969年『ルシファアの反乱』から始まる。国王夫妻の死…ルシファアとアルフレッドの秘密…『ジュピトリア』に隠された闇…ウインストン隊…裏切り…サラの想い…そして…キールの本当の目的とは？ラフマイル帝国軍『ジュピトリア』に渦巻く闇に挑むキール・シュナイザーの戦いの記録。 【読んでくださった方は評価をお願いします。辛口大歓迎です。】

【0】序章（前書き）

【0】序章 は時代背景の説明となっているため、時間がない方は読み飛ばして 【1】邂逅 から読んでいただいても結構です。
本編は 【1】から始まります。

【0】序章

俺はこれで…
よかったんだよな？

……サラ

宇宙暦1969年。
ラフマイル帝国。

この国も、以前は緑豊かで美しい、平和な国であった。
そして、国民はみな、エルローシュ国王夫妻を慕っていた。

そんな平和に終わりが訪れることになったこの年。
殺された。
国王夫妻が。

実の息子、ルシファー王子によって。

王子は即、王属機関であり、この国の軍隊である『ジュピトリア』
によって捕らえられた。
そして死刑になった…と国民には報道されているが、事実を知る者
は『ジュピトリア』にしかない…。

その『ジュピトリア』により擁立された新たな王は、ルシファアの弟、アルフレッド王子であった。

だがこの弟、意志が強く勇猛果敢であった兄とは異なり、優柔不断でなにも1人では決められず、気が弱く、そして…頭が悪かった。そのことを利用した『ジュピトリア』は、事実上の独裁状態に入っている…。

国王夫妻の死により、悲しみに暮れていた国内は、アルフレッドが王になったことにより、酷く混乱した。

各地で内乱や暴動が発生し、多くの国民が死んだ。

すべての騒ぎは『ジュピトリア』により鎮圧されたが…圧倒的な強さを誇る『ジュピトリア』は、国民に恐れられ、そして…恨まれた。

その『ジュピトリア』。

この組織にラフマイル帝国は莫大な予算を注ぎ込んでいた。

よって、巨大な要塞が国内各地にあるが、最大であったのはやはり首都ラフマイルにある巨大要塞『イージス』であった。

この『イージス』では、兵達が日常の職務をこなすとともに、士官学校も併設されていた。

士官学校に入れるのは、志願兵の中で特に優秀な者のみであり、入学時には厳しい試験が科される。

しかしその分、受験者の年齢や出身、性別などは問わなかった。

その士官学校の射撃場で…今まさに、運命を変える2人が出会おうとしていた。

… 双方が重い過去を隠しながら…。

【1】邂逅

「キール・シュナイザー… 1953年11月28日生まれ、ブラッドタイプA、特技は射撃、出身地や経歴は不明…ね。この子が噂の『雷』くんだったかしら？」

「はい、そうです。なんでも、この学年は優秀な者が揃っているらしいのですが…中でもこいつは飛び抜けているらしいですよ。」

「そう…。興味深いわね。即戦力になりそうなら、ぜひうちの隊でとりたいたいものだけど…まあ、実際にこの目でみてみなきゃ何とも言えないわ。こんな紙切れで人は判断できない。」

「おっしゃる通りですな。」

射撃場前の廊下を歩く2人の士官の姿に、その場にいた生徒達は目を疑った。

（おい、あれって…！？）

（はあ？…嘘だろ！？なんでこんなところにいんだよ！？）

（俺が知るかよっ！！）

ざわつく生徒達に気付くと、女の美しい士官は言った。

「ごめんなさいね…邪魔しちゃって。私達に気にせず、そのまま続けてください。」

「はっ、はい…！！！！！！」

生徒達は静まり返った。

…1人の男を除いては。

「あの子ね。」

ショートカットの黒髪に、茶色の目。

長身で、あまり軍人とは思えない、タイトな体つきだ。

士官の2人組が来ても全くかまうことなく、的に向かって銃を撃ち続けている。

しかもそれがすべて中心に的中している。

（へえ、やるじゃない。）

女は男の士官に、銃撃を一旦中断させるよう指示した。

「君、シュナイザー君だね？」

少し話があるのだよ。

こちらは『ジュピトリア』ウィンストン隊、メアリ・ウィンストン少将でいらっしゃる。

少将が直々に、君と話がしたいそうだ。」

「!？」

さすがに気の強いキールも、驚きを隠せなかった。

メアリ・ウィンストン…『ジュピトリア』四天王と呼ばれる最強の將軍の中の紅一点。

同時に、最強の強さを誇るウィンストン隊の隊長だ。『ジュピトリア最強』と言うくらいだから、キールはもっと敵ついゴリラみたいな女を想像していた…が。

まさかこんなに普通の、いや、むしろ美人で華奢な女だとは夢にもおもわなかった。

「少将が俺に…何の用っすか？」

「こらお前！言葉に気をつけ…」

少将は男を手で制し、笑顔で言った。

「いいのよヴェス大尉。」

初めまして、シュナイザー君。私はメアリ・ウィンストン。地位は少将よ…知ってるかもしれないけどね。」

「？…初めまして。キール・シュナイザーであります。」

將軍自ら、俺に何の用でしょうか？」

「君の優秀な成績を聞き付けたのよ。」

随分銃が得意だそうね…さっき射撃訓練見てたけど、大したものだわ。」

「自分にはもつたいないほどのお言葉です。」

「あら、私はお世辞は言わない主義なのよ？」

…でも、君の本気はあんなもんじゃない気がするんだけどなあ…私の気のせい？」

「！？」

「何か隠してる能力、あるわね？」

「…なんでもお見通しなんですネ。」

「伊達に隊長やってないわよ。」

「…で、それをあなたに見せると？今ここで？」

「そうゆうこと。」

「いいですけど…たぶん…壊しちゃいますよ？」

「どうぞどうぞ、ご自由に。」

（的を壊す…一体どうゆうことなのかしら。）

すると、キールが持っている銃が光り出した。金色に。

「…なるほど。」

「少将？」

「彼も私と同じなのよ。」

キールは銃を構えて…撃った。

バリバリバリバリ…
銃撃は雷を纏っていた。

【2】雷と炎

（ザワザワザワ…）

（相変わらず…だな…）

（うわっ…あいつ何なんだ…）

この銃撃を見たことがある者もない者もざわついた。
的は粉々になり、飛び散った破片は焼け焦げていた。

「な…なんなんですかこいつは！？」

「だから言っただじゃない大尉…『私と同じ』って。」

「え…じゃあこいつも…？」

「きつとね。」

キールが戻って来た。

「さっきの銃撃…その宝石の力でしょ？」

「！？」

キールの銃は特注品であり、銃身には1つの黄色の宝石が埋め込まれていた。

メアリはそれを指して言ったのであった。

「なんでそれを…？」

「あら…その宝石を持っているのは自分だけだと思っていたのかしら？」

「え…？」

次の瞬間、射撃場は熱気に溢れた。

キールの目の前で…炎が揺らめく。

メアリが抜いた漆黒のサーベル…その刃から溢れ出す炎…

「！！…あんたもまさか…！？」

「ええ…このサーベルには私の宝石が使われているわ。」

柄の部分には赤い宝石がちりばめられていた。

炎と同じ色で…輝いている。

「少将！こんなところで炎を展開させては…」

「わかってるわ。」

すると、炎が一瞬にして消え、普通の…漆黒な時点で普通では無いのだが…サーベルに戻った。

どよめく観衆。

（なんなんだよあの女！）

（噂通り…やばいぞ…）

キールは啞然としながらも、メアリに迫った。

「少将！教えてくれ！この宝石って一体何なんだ！？そもそも何で

…」

「ちよつと待ってちょうだい…。あなた…何も知らないで使ったの？これのこと。」

「はい…。」

「じゃあ、質問を変えるわ。その宝石…本当にあなたの物？」

「！？…答えられません。」

（…何かあるわね。この宝石の持ち主が、宝石について知らないはずはない…。）

メアリはキールが人には言えない何かを背負っていることを悟ったが…敢えて問い質すことはしなかった。

「わかったわ。」

今日はこのくらいでもういいから、明日、私の執務室へ来てもらえる？

今日私が来た理由と、この宝石について…話があるわ。」

「？…はい、わかりました。」

「そしてもう1つ。私がここへ来たこと、あなた達が見たこと…すべて他言無用…ということにしたいんだけど、いいかしら？」

これはもちろん、観衆への命令だ。

「…はい！！！」

「それでは…またね、シュナイザー君。大尉、行きましょう。」
「はい。」

キールはまだ頭が混乱していた。

「この宝石…」

そしてもう1つ。

「あの女…一見穏やかそうだが、やはり噂通り…いや、それ以上だ。あのサーベルから放たれていた炎…」

「少将、あいつ…」

「ええ。まさか、あの宝石を持っているから『雷のキール』…か。」

「どうするおつもりですか？」

「どうって…決まってるでしょ？あの子を『レイン』側に渡すわけにはいかない。」

私達は負けられないのよ…どんな手を使ってもね。」

「ええ…そうですね。」

「明日が楽しみね…彼はこの局面で最も重要な…絶対に手放せないカードよ。」

【3】野望（前書き）

いつもありがとうございます。
些細なことで結構ですので批判や感想をいただけると嬉しいです。

【3】野望

（「これ…を…キール」

「馬鹿、お前…すっかりしろ！喋んなくていいから！」

「よくない…わ…、これは…あたし…なの…よ？これが…あなたを

…キールを…守って…」

「おい！おい！…」

「おいッ！……！！！！！！」

「………夢？」

思い切り叫んで、目が覚めた。

「夢…か。久し振りだな、あの時の夢は…」

キールは大量の汗を拭って身仕度を整え、少将の元へ向かう準備を始めた…が。

まだ約束の時間まで3時間もある。

少将の執務室も、キールの寄宿舎がある『イージス』の中にあるため、行くのにそう時間はかからない。

「少し…調べてみるか。あの女…絶対何かある。」

書庫へ行き、ラフマイル帝国の歴史書を開いてみた。

『…メアリ・ウィンストン、ルシファアの反乱当時の階級は大佐。

国王夫妻を殺害したルシファア王子を、たった1人で捕らえる。後にこの働きが評価され、准将に昇進。

宇宙暦1970年の、ベルベットの内乱時は作戦指揮官でありながらも自ら出陣。

しかし陣形を乱すこともなく、内乱の早期鎮圧に貢献した。この働きにより階級は少将となり、現在に至る。

数多くの内乱や紛争で活躍し、我が国の危機を幾度となく救ってきただ。つけられた異名は

「灼熱の天使」……」

「……ベルベット！？あの事件に！？この女も関わっている……これは……利用しない手はないな。それにしても……『灼熱の天使』……か。まさに、だな。」

ちょうど時刻は約束の時間まであと15分、といったところであった。

キールは歴史書を閉じ、少将の執務室へと急いだ。

時を同じくして執務室。

「あのボウズ……本当に来るんでしょうか……？」

「来るわ。絶対にね。きつと……私のことも調べて来るでしょう……ま、情報統制がなされているから、肝心なことは何も分からなかったでしょうけど。」

「やはり……あいつが聞きたいのは、少将のそのサーベルのこと……ですかね？」

「それだけでは……ないんじゃない？きつと。直接は聞いてこないと思うけど、あの子、何か、誰にも言えない何かを抱えてる……そんな気がする。」

「何か……ありますか？」

「そう。あの目が気になるのよ……例えば……『レイン』関係のこと

とか？」

「！？…まさか…あいつも！？」「いえ、まだ推測の域を出ない話よ……ほら、本人も来たみたいだし、この話は追々…ね？」

「…はい。」

…コンコン

「キール・シュナイザーであります。」

「どうぞ。」

「失礼致します。」

キールは柄にもなく緊張していた。

メアリがまず口を開いた。

「あら、緊張しているの？昨日とは随分態度が変わったみたいけど？」
クスクス笑いながらも、すぐに本題に入った。

「何はともあれ、キール・シュナイザー君。今日は来てくれてありがとう。まずは私があなたを呼んだ理由を話さなきゃね。…ストリートに言っけど、あなた、私達の仲間にならない？」

「！？」

キールは驚いた。

まず、自分はまだ士官候補生であり、ただのヒヨッコで…もちろん、実戦経験なんかない。

しかも、まだこの女と知り合って1日しか経ってない。自分が本当は何を考えているかなど、この女が知るはずもないのだ。

「了承しかねます。俺…私には、少将のおっしゃっていることが…理解できません。」

「あら、そう？私は至って真面目に、あなたをスカウトしたいと思っただけなのに。」

学生だからってことを心配してるのかもしれないけど…將軍クラスの人間からの推薦があれば、すぐにでも卒業できるのよ？必要なことはもうすべて学んだだろうし。」

「俺が聞きたいのはそれだけじゃないってことくらい、あなたならわかってるはずだ。」

（やっぱりこの子…頭もキレるわね。さて、どうしようか。…率直に言うべきよね。）

メアリは少し考えて、答えた。

「あなたは何か…『野望』みたいなものを持ってるんじゃないかしら。それも、人には絶対に言えないような『野望』を。」

またも、キールは驚き、

「！？…なんで…そう思うんですか？」

「うゝん…強いて言えば、あなたの『目』かしら。どことなく昔の私に似ていて…もしかして、私と同じ『野望』を持ってるんじゃないのかな、と思ったのよ。そのためには…やはり、あなたの力は欲しいの。」

私と同じ『野望』、という言葉を発した瞬間の、一瞬の瞳に映る炎の揺らめきを、キールは見逃さなかった。

「少将、まさかあなたも…！？」

「うふふ…さあ、どうかしらね。」

いつもの様子に戻った少将は言った。

（この女もまさか…いや、そう簡単には信じられない、が…このチャンスを逃すわけにもいかない。ここは…）

「わかりました。少将直々のご指名を…断る理由は、もうございま

せなので…その命、謹んで、お受け致します。

ですが…その前に、私からどうしても少将に聞きたいことがございます…。」

キールは、そう、あの『宝石』について、ぶつけてみることにした。

【4】アテナ（前書き）

ここから、みなさんからのご指導を受けて、書き方を気をつけてみました。

また、これ以前のものはパソコンを使える状態になりましたら修正いたしますので、お待ちください。

【4】アテナ

「…もうひとつだけ…」

「宝石、ね」

メアリはキールの発言を予期したかのように、すぐさま答えた。

「この宝石はね…通称『アテナ』…本当の名前かどうかはわからないんだけどね」

「アテナ!？」

キールには全く聞き覚えのない言葉であつた。

「やはり初めて聞く名前なのね。『アテナ』はね、本来はこの国内のある一定の一族の子が代々、手に握り締めて生まれて来るものなの。でも、なぜなのかはわかっていないし、そもそもなんで一部の一族の子だけなのか…そのへんの説明は全く、よ」

「…てことは、少将の…」

「少将なんて堅苦しいから、隊長でいいわよ」

キールは少し躊躇したが、本人がそう言うのだから…と、呼び名を改めた。

「…では、隊長。あなたはその一部の一族の中のひとつの生まれなのですね？」

「ええ。私のウインストン家はまさにその一族よ。あと、同じ一族内では全員同じ属性の『アテナ』を持つから、私の実家の人間はみんな炎。暑苦しいったらありやしないわよね」おどけてみせながらも、メアリは続けた。

「ただね、同じ一族内にも『アテナ』の力の強さには個人差があつて…私の一族はみんなある程度強いけど、私は特に強すぎてね…子供の頃は本当に苦労したわ」

一気に話を聞いて、キールの頭は混乱しかけていたが、聞き出せる情報はすべて聞き出したかったため、質問を続けた。

「では、隊長の一族以外の『アテナ』を持つ一族についても、何かご存じなのですか？」

「ええ、もちろん。だって、私達四天王と呼ばれる4人…私としてはこの呼び名嫌いなんだけどね…この4人は全員『アテナ』をもっているもの」

「え！？！？」

キールは驚きの声をあげた。隊長や自分の他にも『アテナ』を持つ者が…これは、キールの『真の目的』達成への……大きな障害となる可能性が高かったからだ。

メアリは続けた。

「驚くことでもないでしょ。四天王って呼ばれてるくらいなのだから。彼らはね、それぞれ氷、土、風の属性の『アテナ』を所持していて、それぞれとても強力よ」

そこまで聞いて、キールは疑問に思った。

「では、俺のように四天王以外の人物が持つことは…？」

「あるわよ、現にあなたが持つてるじゃない…まあ、なにか秘密があるようだけれど？普通は両親からしっかり教えを受けて育つはずだから、知らないなんてことは普通ありえないのよ」

「俺に両親はいません」

キールは即答した。

「あら…いろいろと訳ありなのね…まあ、答えてくれそうにもないから、あえてなにも聞かないわ」

キールはこのメアリの配慮に感謝した。

（やはり…普段の様子は、『灼熱の天使』とは程遠いな）

そんなことを思っているうちに、メアリはキールの入隊についての詳しい話に移ろうとしていた。

「『アテナ』については、今日はこのくらいにしましょ。また追

々、詳しいことは教えてあげるわ」

「はい…ありがとうございます」

「いえいえ、あなたの『アテナ』の力は、私の隊には絶対に必要なのだから…このくらいの話はいくらでもするわ。で、入隊の件なんだけれど…詳しくは、こちらのハサウェイ・ヴェス大尉からしていただきますしょうか」

キールは、

「絶対に必要…」と言うメアリの目に、またもや炎の揺らめきを見た…が、今はヴェス大尉と呼ばれた、メアリのそばでずっと控えており、射撃場にも同行していた、タレ目で顎鬚を生やした士官の話をおとなしく聞くことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1057g/>

REQUIEM

2010年10月11日16時40分発行